



公立芽室病院 第83号

だより

ホームページアドレス
http://memuro.com
又は芽室町ホームページのトップページから
アクセスできます。

『医師と住民の力で守ろう地域医療』

～私達にできることは何か～

平成23年3月26日、芽室町駅前プラザめむろ一ど2階セミナーホールで、十勝町村立診療施設協議会主催の地域医療公開シンポジウムが開催されました。基調講演とシンポジストの発言要旨をお知らせします。



基調講演

『留萌における地域住民による医師・看護師招へいの実践』

講師：留萌がんばるかい 事務局長 森 義和 氏

【要旨】

私は留萌市立病院のためだけでなく、すべての自治体病院のために医療のボランティア活動をやりたいと思っています。ただ、医療は特別な有資格者で構成されている世界です。私は医療の資格は何も持っていません。ただ、やる気はあります。

留萌市立病院は留萌2次医療圏の中の中核病院とされています。4,019km²という広大な医療圏は東京都の2倍ぐらいの面積にもかかわらず留萌市立病院が一つで頑張っています。

留萌市立病院の病床利用率は平成14年度に88.5%あったのが平成19年度には64.9%まで下がってしまい、年間33万人いた患者数が22万人までに激減してしまいました。経営状態は2009年、日経新聞が調べたところ、1,000を超える自治体病院の中で全国ワースト9位という報道がされてしまいました。こういう状況であったため、医者や看護師を確保して市立病院の不安感を払拭するという事は留萌市だけではなく近隣市町村も含めた6万人の共通する最重要課題となったわけです。そんな中で私はボランティア活動を始めました。やっぱり自治体病院が地域で一番良い病院だと言われるような活動をしたいと思っていました。

留萌市立病院に限って言えば、医師1人、薬剤師1人の勤務が実現しました。看護師志望の地元の人が3年前と比較すると2倍以上になっています。もともと留萌市立病院は笹川院長を始めとして懸命な取組がされていたので、我々の活動と相乗効果があって実現したことが議会や市民の間に渦巻いていた批判を沈静化することができましたし、外来と入院患者も増加傾向になっています。また、経営も何とか単年度黒字が達成できた模様であるので、全国ワースト9位とい

うのはかなり払拭できたと考えております。

ボランティア活動を始めた動機は、特別な思いのあるおばが2007年の暮れに市立稚内病院で亡くなったことです。おばがすい臓癌を患って、市立稚内病院で闘病生活をしていた際、亡くなる前に市立稚内病院や留萌市立病院のような病院を絶対に命を懸けて守るよにと私に命令(遺言)をしました。その理由を幾つか挙げてもらったところ、死は平等に訪れること、病になれば苦勞はするけど不幸ではないこと、病と闘う意思がある者については闘病するチャンスが法律上与えられているはずだと言っていました。地元で発症した病を地元で闘病する手段が守られていれば、おばのように家族や友達や愛する人に囲まれ安心して病と闘う人がたくさん増えることが、その時想像できました。

自治体病院を守るために私が個人的に必要なと思っていることは、1番目に海外の医育大学との連携、2番目に園芸療法、3番目に病院見学ツアー、4番目に広報誌やホームページなどのサイトの充実です。資金集めがすごく大変ですが、組織化するなど色々な方法や、一致団結とかが重要になってくると思います。

自治体病院の不採算部門と言われる救急救命は、とてもコストがかかります。近隣市町村からの負担はありませんが、救急搬送は断れないし断らないという「しなやかさ」は経営という厳しい目で見ると断ってしまった方がいいのでしょうか、そんなことはないですし、私も許さないのですけれども、経営的には近隣市町村の救急搬送を断った方が直ぐに黒字になってしまうぐらい不採算部門であります。要は受ければ受けるほど救急救命は赤字になるという言い方は決して大げさではありません。こんな「かっこいい病院」、こんな「すごい病院」を私たちが支えたい、維持していくぞと思え

るようになればいいなと思っています。

最後に、誰のための医療なのかを考えた時、自分たちのためですので、「議員にやらせればいい」とか「町長

にやらせればいい」という話は今日で終わりにしていただきたいと思っています。病院を守る活動というのは新しい街づくり活動だと思っています。

シンポジストの発言要旨

『地域で守ろう国保病院』

国保病院中士幌応援団 副団長 貝守良光氏

士幌町は人口が約6,600人、うち中士幌地区は約1,000人という小さな町です。この中士幌には以前より「中士幌街おこし勝手連」というボランティア団体がありました。この勝手連というのが会員16人ほどで異業種の集まりで作っている団体です。

国保病院の応援団の活動をするにあたり、住民の意識を国保病院に目を向けてもらい、病院利用者を増やしたいという目的のためと、この応援団の活動内容を多くの地域住民に知ってもらいたいということから団員が地区の家庭を1件1件回り説明し、団員増強のために走り回ってくれました。その結果、中士幌地区は約1,000人の小さな集落ですが、そのうち400人もの住民が団員として加盟してくれました。このようにして、地区住民の大変力強い支援を受けることができたのと同時に病院に対する関心が非常に強いことも感じました。

応援団が最も力を入れて行っている事業で2007年から毎年実施している無料の健康相談会があります。応援団員手作りのチラシを中士幌地区全戸に配布してお知らせし、地区住民の方に日帰り健康チェックをしていただきますという事業です。何かあった時には士幌の国保病院を利用してもらい、受診率の向上につ

シンポジストの発言要旨

『医師と住民の力で守ろう地域医療』

鹿追町国民健康保険病院 院長 白川拓氏

医師不足の原因はなんと言っても医療費抑制政策で医師の絶対数の不足、病院での必要医師数の不足、地域偏在による不足、診療科でも小児科や産科で医師不足が起きています。2007年12月から公立病院改革ガイドラインが公表され、地域での医師不足が著明のまま、自治体病院の規模縮小化が進んでいます。全国各地で「病院を守る会」が設立され、病院の存続や発展に大きな貢献をしております。

道内の105の自治体病院では100床未満の小さな病院が6割を占めています。療養病床を持ったいわゆるケアミックスで苦しい運営をしております。十勝管内の自治体病院は8施設あって、すべて郡部に存在しています。郡部の特徴は療養病床を多く持っていることで、十勝の自治体病院で芽室町以外は診療所への転換を数年前から求められています。公立病院のガイドラインができて、病院規模を縮小することが求められるようになったことから「留萌のがんばるかい」や「国保病院中士幌応援団」のようなすばらしい団体ができてきたと思います。全国で同じような団体が次々と設立され

ながってくればと思っています。

二つ目の取り組みは、国保病院の存続に向けたチラシの作成と、ご意見箱の院内設置です。チラシには「私たちが診てくれる病院がなくなってもいいのですか」と少タイムパクトのある見出しをつけて、院内に掲示をしております。また、士幌町国保病院や応援団に対する意見などを地域住民から幅広く募集しております。回収した意見などは病院側に伝え、病院運営の参考にしていただいたり、アンケートの結果は町の広報誌などに掲載しています。

この地域医療に関して、財政的な視点だけを優先して考えるべきではないと私たち応援団は思っております。どこに住んでも誰もがいつでも安心して医療を受けられるような体制づくりが必要ではないでしょうか。私たち地域に住むものにとって病院がなくなることは地域の崩壊につながる可能性があると思っています。そうならないためにも私たち一人一人の町民がこれまで以上に自分たちの病院に目を向け、関心を持ち、何かあった時はまず地元の病院を利用する。これが病院を存続させ、地域医療を守る第一歩だと私たち応援団は考え、これからも活動を続けたいと思っております。

ています。

鹿追町は人口約6,000人の町で、診療所が2か所あり、老健施設、特養もあります。鹿追町国保病院は2人の医師でやっていて、病床数は50床で一般23床、療養27床です。医師は不足していますが、小児科が月1回、眼科が月2回、泌尿器科・循環器科・脳神経外科が月1回ずつ診察をしています。医師が足りなく、専門医がいらないわけですから専門医に定期的に来てもらい、住民に便宜を図っております。あとはケアミックスを行っております。専門性よりも多機能性を重視しているので、効率は悪いです。効率を良くしようなんて思う必要はないと思います。医療は効率ではありません。確実性です。効率ばかり考えると確実性が疎かになってしまいます。安全な医療ができなくなります。

鹿追町国保病院は、現在50床で運営しており、2004年までは、老健施設と診療所を新築する計画でしたが、2009年4月に50床の病院のままで増改築することに変更され、医療連携型高齢者専用住宅10床を併設して同一敷地内で現在建設中です。